



Title	川端康成『再婚者』論：「家」を中心に
Author(s)	De Souza Pinhero, Elaine
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100490
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

川端康成『再婚者』論

—「家」を中心に—

DE SOUZA PINHEIRO Elaine (日本学・M1)

1. はじめに

川端康成(1899-1972)は、1920年代から30年代にかけて、「掌の小説」という小品や、浅草を舞台とした「浅草物」を精力的に発表することで、横光利一と共に「新感覚派」の代表的な作家として文壇的地位を確立した。ただ、戦時下から敗戦直後には執筆のペースを落としていった。もちろん短編はいくつか発表し、中断した作品も完成させた。しかし敗戦3年後、新しい連載小説を発表した。それが『再婚者』¹である。

『再婚者』は、主人公「私」と妻の時子、そして時子の子供たちをめぐる物語である。時子は夫を喪い、「私」と再婚するが、彼女の連れ子である房子は、母の二度の結婚生活に関心をもち、これに対する「私」の認識を問いかける。「私」は時子と亡夫池上先生との結婚生活に悩み、その心情を〈手記〉に残し、旧友A.Gに託す。

同時代的には、連載小説として、「矛盾した概念が微妙な均整をたもって調和している」こと²や、「充実感のあふれる佳篇であつた」³という認識が見られるが、作品そのものよりも、それを書いた作者の態度を評価されることが多かった。先行研究では、本作をそれ以降の同様の主題を扱う川端作品の端緒と見る傾向がある。永丘智郎(1978)は、『再婚者』をそれ以降の連載小説の先行作品として位置づけ、本作の主人公は「川端作品の中で最も作者の実像に近い」と述べている。大坪利彦(1988)は本作を『千羽鶴』と比較することで、両作品に見られる結婚は「男女関係」と「家」を意味すると述べた。辻秀平(2022)は、テキストの構造に着目し、「私」の「連想」が「作品構造上重要な役割を果たす」ことを示した。

しかし、「私」とその他の登場人物の関わりや同時代との関係性については、これまで十分に注意が払われてこなかった。本作は「私」の視点から描かれているが、出来事は時子と房子の言動によって展開され、〈家〉の構成や血縁をめぐる親子関係の変化が中心になっている。従って、親子関係の変化や〈家〉の構成に注目することで、本作における〈家〉の意味を明確にする必要がある。

『再婚者』は同時代以来、先行研究において長く、川端康成その人や、この後に書いた連載小説との関連で論じられるのが常であった。近年になって作品構造の分析も始まりつつある。本論では、作品分析を内容面からより深めつつ、この作品が発表された敗戦直後という時代との関わりに重点を置いて考察する。特に、この結婚をめぐる物語は、〈家〉に着目して読み直す必要があると考える。発表当時は、「家制度」の廃止から1カ月後である。〈家〉の概念の変化、そして再婚が多くなった時代に、以前の状況と規定によって様々な悩みを抱える親子を描いているテキストとして『再婚者』を読むことができる。〈家〉が本作の展開や登場人物の言動にどのように影響を与えるかを明らかにすることは、本研究の目的である。

2. 『再婚者』の同時代状況

『再婚者』は、敗戦から2年後の1947年秋頃に執筆が始まり、中断を挟んで完結まで4年を要した。戦後、日本社会は政治的に変化し「家族」の組織と規範は大きく形を変えた。本作で「私」を悩ませる時子と子供達の親子関係に関する

¹ 『再婚者の手記』は、1948年1月から5月・8月に連載され、1952年1月に、続編の『娘の結婚』は「新潮」で連載された。1952年2月に刊行された『川端康成全集第13巻』では、「手記」という言葉が省かれ、前後編を合わせて『再婚者』として改題された。

² 豊田三郎(1948)。「文藝時評(中) 小説の感動性」『世界日報』世界日報社。

³ 朝日新聞社編(1978)。「日本文化」『朝日年鑑 1949年版』朝日新聞社。

⁴ 正岡(1975)は、〈家〉を「封鎖的な地域共同体において特定の身分・階層的な位座を占有し、そしてそれを該当する役割を担っている」と定義している。これに基づき、本研究では〈家〉を空間的な側面ではなく、観念的な組織として取り扱う。

記述から〈家〉の意味と認識を検討できる。

物語世界の現在時は1946年頃、占領開始から1年後の時期である。占領体制の下で、日本では非軍事化と民主化が進行し、憲法改正や民法改正が議論されていた。ただし、これらの動きは、単なる占領軍から強制されたものでなく、日本に既に存在した政治潮流が大きな影響を与えた(雨宮, 2008:88)。「家制度」の廃止はその後の社会改革の大きな基盤の一つとなった。

「家制度」は1898年の明治民法で公布され、国家アイデンティティの構成と近代化を図るために、重要な手段であった。そのため、血縁関係などは〈継続〉という形で重視されるようになり、結婚や交際が制限され、特に女性に「貞操」を守る必要性が要求されはじめる(川村, 2004: 91)。軍事化と超国家主義の強化を背景に、〈家〉は国家を支える重要な土台となる。

敗戦後、「民法改正」は民主化の重要な課題となり、「家制度」と「戸籍制度」の廃止をめぐる議論が活発化した(川島, 1948:57)。民主主義革命を目指す側は、「家制度」が国民の生活実態にそぐわず権利や自由を束縛していると批判した。一方で、維持を主張する側は、儒教的価値観に基づき国民が制度を支持してきたと述べた。最終的に、大日本帝国の解体と政治改革の一環として「家制度」は廃止されたが、「戸籍制度」は一部改変されつつも存続した。

以上の状況を踏まえ、本作における〈家〉を分析する。時子と房子の親子関係には「家制度」と「戸籍制度」が影響を与えたと考えられる。二人の言動により〈家〉はどう捉えられ、どのように登場人物に影響を与えるのかを明らかにする。

3. 『再婚者』に見られる「家族」のイメージ

『再婚者』において〈家〉の規範は、登場人物の関係を密接に規定している。本作は1948年1月に発表され、「家制度」の廃止から1ヶ月後である。しかし、物語内で描かれる時代背景は1946年であり、「家制度」廃止に向けた議論が進んでいたものの、旧民法は依然として実行されていた。また、「私」の回想において登場人物たちがおよそ30年前の時期に結びつきを形成していたことが明示される。これを踏まえると、当時の制度が登場人物の生活や「家族」関係に深く影響していたことが伺える。

本作では〈家〉が特に時子と子供たち(清と房子)の关系到大きく影響している。時子は「夫と死に別れてから、子供は婚家に残して實家に戻った時点で、子供たちと「家族」としての関係が断たれたと解釈できる。血縁よりも、子供たちの戸籍が重視される時代背景があった。しかし、婚家を出た後も時子と子供たちの関係は完全には途切れない。房子は「私の家へ自由に出入りする」ようになり、時子と子供たちの関係は表向きには断絶しているが、密かに続いている。

房子と清は叔父夫婦に「引き取られた」が、時子は一度も「弟の細君に會つたことはない」。時子は婚家を出たことで、子供たちの育成に関する意見を言う権利を放棄し、その負担を担ったのは叔父夫婦であった。その背景には〈家〉の規範が関係している。時子が生母であっても子供たちは池上家の一員であるため、婚家を出た時点で時子は親権を失った。そのため、房子の婚礼へ行く場合、叔父夫婦とどのように接するかが時子にとって課題となる。また、子供たちは約6年間「私たち」の家に通っていても、時子が彼らの母として公に顔を出すことは好ましくないと「私」は考える。

房子は池上先生の残した日記を読むことで、自分の出生や父親の母親に対する愛情に疑問を抱く。それゆえ、その関係から生まれた自分も「純潔」ではないと考え込む。併せて、房子は結婚に失敗すれば「歸る家がない」と思い込む。「私」は時子のこれまでの態度を振り返り、冷淡な母親と見なすが、時子自身は「感情が疏通し」と信じている。さらに、房子は時子を婚約者に会わせようとするが、相手が「叔父さまたちにかくれて會ふのは、いや」だと拒み、時子は「お母さまになれない」と言われる。関係を維持するために努力する二人の姿を見て、「私」は彼女たちの関係を見直す。

房子にとって時子は母親として認められる存在であるが、婚約者の「家族」や房子を育てた叔父夫婦にとって時子は房子の母親ではない。このように本作では、「家制度」が血縁よりも戸籍・社会的な立場を優先させる仕組みとして機能している。それは、「家族」のつながりが法的な規範によって制限される社会の現実を映し出している。

4. まとめ

『再婚者』は、主人公「私」の視点を通じて時子の性格や親子関係を描く作品として捉えられる。一方、登場人物間の関係における「家制度」の影響を描き出す作品である。時子が婚家を離れたことによって生じた親子間の立場の違いが作品の展開に重要となっている。つまり、〈家〉と〈結婚〉の概念の変化、そして〈再婚者〉が大勢いる時代に、それ以前の状況と規定によって様々な課題を抱える親子関係を描いている作品として『再婚者』を読むことができる。今回は、川端

康成の『再婚者』が戦後の日本社会の「家族」観や社会制度の変化にどのように応答しているのかを分析した。今後の課題として、同時代の新聞を用いて、政治的变化がどのように報じられていたかを調査することが挙げられる。また、川端康成が他の作品でどのように「家族」を描いているのかを比較することで、戦後文学における彼の位置づけを明確にすることができるだろう。

参考文献

- 雨宮昭一 (2008). 『占領と改革』 岩波新書.
- 稲垣恭子 (2007). 『女学校と女学生』 中央公論.
- 大坪利彦 (1988). 「千羽鶴」論——「再婚者」を手掛かりに」『明治大学大学院紀要』 明治大学, 25-42.
- 川島武宜 (1948). 『日本社会の家族的構成』 學生書房.
- 川端康成 (1970). 『川端康成全集 第7巻』 新潮社.
- 川端康成 (1970). 『川端康成全集 第14巻』 新潮社.
- 川村邦光 (2004). 『性家族の誕生』 筑摩書房.
- 小山静子 (2022). 『良妻賢母という規範』 図書研究社.
- 正岡寛司 (1975). 『「家」と親族組織』 早稲田大学出版部.
- 辻秀平 (2022). 「川端康成『再婚者』論・序説——成立背景と作品を巡る基礎的考察——」『川端文学への視界 37 年報 2022』 川端康成学会, 71-88.
- 永丘智郎 (1978). 「川端康成の戦後人間愛」『甲南大学紀要 文学編』 28, 甲南大学, 1-18.
- 山中永之佑 (1988). 『日本近代国家の形成と「家」制度』 日本評論社.